特別寄稿

今回は京都大学地域研究統合情報センターで「災害地域情報マッピング・システム」の開発にあたってこられた山本博之先生から原稿をお寄せいただきました

データベースに何ができるのか
―災害地域情報マッピング開発の経験から―

京都大学地域研究統合情報センター
山本　博之

はじめに

「宗教と地域の時空間マッピング ニューズレター」に寄稿を勧められたため、筆者が同僚の西芳実さんらと開発してきた災害地域情報マッピング・システムについて紹介しながら、宗教と地域の時空間マッピング・プロジェクトで進めている寺院マッピングについてのいくつかの考えを共有したい。

筆者は、2004年のインド洋津波（スマトラ沖地震・津波）を契機にインドネシアを中心に災害対応と情報に関する研究を始め、最近ではインドネシアの災害研究者と見られることが増えてきた。しかし、もともとマレーシアの民族概念と混血性を研究テーマとしており、その立場からマレー語雑誌データベースやマレーシア映画データベースを作成し、それらを通じてイスラム教圏東南アジアにおける宗教や「目に見えないもの」の捉え方を模索している。そちらの立場の方が「宗教と地域の時空間マッピング」というテーマに合致するようにも思われるが、マレー語雑誌やマレーシア映画のデータベース構築はまだ初歩段階にあるため、ここではデータベース開発が比較的進んでいる経験をもとに、インドネシアを事例に災害地域情報マッピングの開発を行ってきた立場から書かせていただくことにする。

なお、筆者は、寺院マッピングに関して、何度か研究会での発表を伺ったことがあり、関連する共同研究の報告書（片岡樹編『聖なるもののマッピング――宗教からみた地域像の再構築に向けて』(CIAS Discussion Paper Series No.26、京都大学地域研究統合情報センター、

2012 年。以下「報告書」と呼ぶ）を読ませていただいた程度の理解しか持っていない。筋違いの見解を述べていることがあるかもしれないが、比較的身近な場所にいる部外者がどのように理解や誤解をしているかという観点からお読みいただければ幸いである。

１．データベースが社会の課題にどう役立つのか――災害地域情報マッピングの経験から

(1)「小さな災害」のマッピング

筆者らは、京大地域研や他の機関・プロジェクトの協力のもと、2011 年 12 月にインドネシアのアチェ州バンダアチェ市で「災害遺産と創造的復興―地域情報学の知見を活用して」というシンポジウム／ワークショップ（以下、ワークショップ）を行った。5 日間で 4 つの会場で行われたワークショップでは、日本側・インドネシア側あわせて 37 件の報告があり、のべ 600 人が参加者したたいへん盛況な会合となった。しかも、ワークショップでのすべての議事を英語ではなく日本語とインドネシア語で行ったため、通訳した地域研究者の苦労は大変だったものと思うが、社会のさまざまな層の人々がそれぞれの現場の事情に即して質問を投げかけ、意見を述べるというとても内実の伴ったワークショップになった。（なお、ワークショップの詳細については報告書（山本博之・西芳実編『災害遺産と創造的復興―地域情報学の知見を活用して』（CIAS Discussion Paper Series No.25、京都大学地域研究統合情報センター、2012 年）および記録映像があるのでそちらをご参照いただきたい。）

このワークショップでインドネシア側参加者から伝えられた感想としてとくに興味深いものに、地域研究はこれまでの学問分野と違って現実の問題に向き合おうとする学問分野だとわかったというものがある。2004 年 12 月の津波以来、アチェには国内外からさまざまな人々が訪れ、彼らの専門性に基づいて新しい考え方や情報をもたらしてくれた。しかし、研究者がもたらした考え方は、結果として、どれもアチェの現場で現実に起こっている問題を解決するうえでは十分に役立たないものが多かったという。それに対して地域研究は、現場で実際に起こっている問題に目を向け、それにどう取り組むかを考えようとしている点でこれまでの学問分野と違っているという印象を受けたとのことだった。

このワークショップの目的の 1 つは、筆者らがアチェのシアクアラ大学津波防災研究センター（TDMRC）と共同で開発してきた災害地域情報マッピング・システム（図 1）を公開して、その利用方法について現地社会のさまざまな現場を持つ人々から意見をうかがうことだった。災害地域情報マッピングとは、現地語（インドネシア語）のオンライン情報を自動収集して記事の内容にしたがって分類し、地図上でその記事が関係する地点に紐付けて記事のインデックスを視覚的に示すものである。もともとは災害に関する記事を取り出してマッピングするシステムとして開発したが、同じ原理により事件・事故や選挙などの記事もマッピングして提示できるため、この応用版を「災害と社会　情報マッピング・システム」と呼んでいる。（災害地域情報マッピング・システムおよびその応用版については http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/database/category/40 を参照していただきたい。）

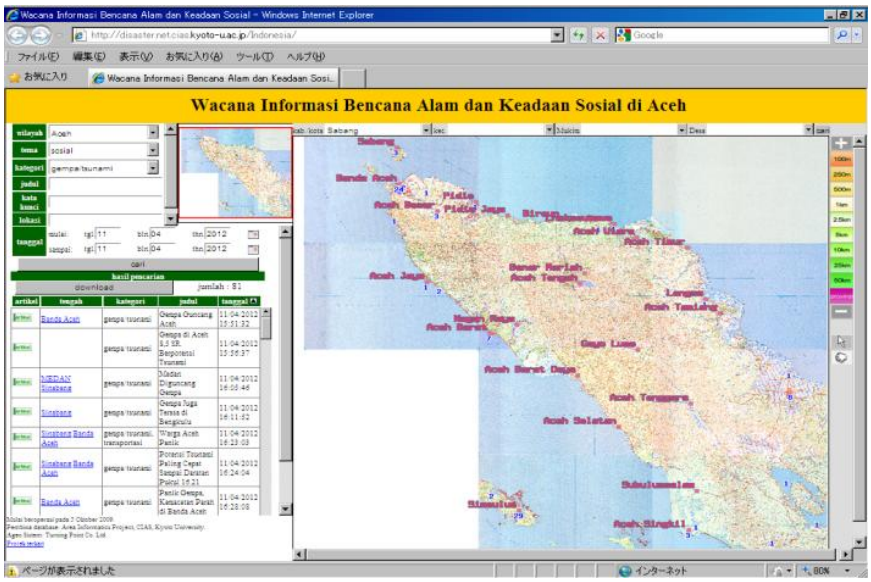

図１:「災害と社会 情報マッピング・システム」のウェブサイト

災害地域情報マッピング・システムは、オンラインの新聞記事を自動収集してテーマごとに地図上に紐付けるサービスであり、汎用性が高いため、災害に限定されずさまざまな分野で応用可能である。開発の過程では、現在進行中の災害に関する情報の提供や、過去に起こった災害の遺物・痕跡や復興過程を記録した津波ツーリズムへの利用などといった利用法を想定して、それぞれ別のデータベースとした。ワークショップではこれらに加え、将来起こりうる社会問題の早期発見・早期対応のために「小さな災害」を見つけ出し、それへの対応を人々の目に見える状態に置く意義があることがインドネシア側参加者から指摘された。

人々は「災害」というと何人もの犠牲者が出る大きな災害を想像しがちだが、橋が壊れたり崖が崩れて道が通れなくなったりする「小さな災害」も数多くおこっている。これらの「小さな災害」は、死者が出ないためにしばしば報道もされず、適切な対応が取られずに放置されたままになることもあるが、たとえば水源への道が通れなくなるなど、「小さな災害」は地域住民にとって死活問題となることもある。

このような「小さな災害」を放置しておくと、その地域で犯罪や事故が多発して治安の悪化が見られるという調査結果がある。そのため、人命が失われないために人々があまり目を向けないこれらの「小さな災害」にも目を向けることによって、地域社会の治安が悪化するのを防ぐ役割を担うことができる。災害地域情報マッピングは、このような「小さな災害」がどこで発生し、それに対して当局がどのように対応したかを人々の目の前に示すことを可能にするシステムである。

(2)現実社会の問題解決のためのデータベース

地震・津波で死者・行方不明者約 16 万 5000 人という未曽有の被害を出したアチェで、「大きな災害」ではなく「小さな災害」と社会問題に関心が向けられていることには理由がある。

アチェは、2004 年の津波からの復興過程を 7 年間経験してきたとともに、紛争からの復興も経験している。アチェでは 1976 年にインドネシアからの分離独立を唱える勢力が活動を公然化し、インドネシア国軍との間で紛争が続けられてきた。災害からの復興も重要だが、それ以上に紛争からの復興、すなわちアチェの地を二度と紛争の地にしないことも重要な課題として認識されている。2012 年に行われた州知事選挙で元独立派ゲリラが州知事に選出されており、世界の注目は再びアチェが紛争地に戻るかどうかに集まっている。アチェを紛争地に戻さないためにも、紛争を小さな芽のうちに摘み取る災害地域情報マッピングの社会問題への応用版が今こそ求められている。そのため、「小さな災害」のうちに見つけて社会問題に対応するというこのシステムの利用法が提案されたのである。

「小さな災害」のマッピング・システムの開発は始まったばかりであり、どのような形の成果が出るかは未知数であるが、それにもかかわらずアチェの人々がこのシステムに期待を寄せているのは、地域社会が抱えている問題を人々の目に明らかにする仕組みであることへの期待が大きいためであるように思われる。アチェは、30 年に及ぶ紛争中、外部社会との連絡が閉ざされ、地域社会で生じるさまざまな問題が人々の目に触れないままにおかれた状態が続いてきた。社会問題の解決のためには、まず地域社会が抱えている問題を互いが確認し、解決の対象として認識しなければならない。そのためにも、それらの課題を外の世界の人々が見ている状況に置くことは重要だと考えられている。

「小さな災害」マッピング・システムは、「小さな災害」についての情報を地図上で表示し、それが起こっている地域だけでなく、州都バンダアチェや首都ジャカルタ、さらには国外の人々にも見える状態にするものである。マッピング・システムそれ自体が「小さな災害」を解決するわけではないが、情報を開示することで社会の問題が改善されるというアチェの人々の期待を反映したものとなるはずである。情報を開示することが社会の問題の解決につながることもある。データベース開発が調査研究のためだけでなく現実社会の課題解決のために役立つ可能性の 1 つがここにあるように思われる。

このように、データベースは、当初は何らかの目的をもって作られるが、潜在的な利用者との問答を通じて内容が変わってくることがある。その結果として、見栄えがよいデータベースや最先端の情報技術を取り入れたデータベースとは違うものが出てくるかもしれないが、それは作り手にとっても使い手にとっても意味があるデータベースとなっているはずである。

(3)地域研究のデータベースが抱えうる課題

災害地域情報マッピングの開発過程では多くの方にご意見をいただいた。ここではそれらのうちとくに地域研究者からいただいた質問をいくつか紹介したい。地域研究者、とりわけ人文社会系の研究者が作るデータベースに共通しうる問題が含まれていると思うためである。

1 つは、情報をどこまで公開するかという問題である。災害地域情報マッピングは、インドネシア語の新聞などのオンライン情報を自動で収集し、それを地図上で表現したものをインターネット上で公開するもので、地図上からオリジナルの記事に当たることも可能である。情報が地図上で示されるため、それぞれの村でどのようなできごとが生じているかが広く公開されてしまい、そのことがその村の住民にとって不利益にならないかという質問があった。

質問者の研究対象は国境付近の難民であり、質問者の意図は、もし国境付近の難民についての情報を公開したら、その情報は難民たちを利するよりも当局が難民を抑圧するために使われかねないというものだったようである。災害地域情報マッピングでは、もともとオンライン情報という公開情報を収集して提示しているために情報の公開に関する問題は生じないし、上述のようにアチェの地域社会の人々には地域の問題を公開することで改善を図りたいという思いがあるため、情報の公開については問題となっていない。しかし、国境付近の難民の様子など、情報の種類によっては公開のしかたを検討すべきものがあるかもしれない。これは、データベースが誰によって何のために使われるかという問題と関わっている。

もう 1 つは、どこまで完全なシステムに近づけたら公開してよいのかという問題である。災害地域情報マッピングでは、いくつかのキーワードを設定してオンライン記事を自動収集している。検索結果を見ながらキーワードを修正して精度を高めているが、それでもテーマに関係するが検索対象外になる記事や、テーマに関係ないのに検索結果に含められてしまう記事が皆無ではない。質問者は、1 つ 1 つのデータはそれぞれの被調査者のこれまでの人生を背負ったデータであり、それらはすべて等しい重みを持っており、どのデータも切り捨ててはならないと思うが、そのように考えるとデータがうまくデータベースに載らないし、載ったとしてもそれをさらに変形させたりできないという悩みを抱えているようだった。

災害地域情報マッピングでは、個々のデータはもちろん重要だが、どれも 1 本の記事として等しい重みをもたせたときに地図上にどのように分布するかを可視化することを第一の目的としており、そのため、データの多少の取りこぼしがあってもやむを得ないという態度で臨んでいる。むしろ、複数のソースから多くのデータを集めることで、1 つ 1 つのデータの重要性を相対的に薄めるところに災害地域情報マッピングの意義があると考えている。

やや性格が異なる話になるが、1 つ 1 つのデータの重みが相対的に軽くなる例として、2012 年 4 月 10 日にスマトラ島沖で発生した地震と津波に関する情報について紹介したい。地震の規模が大きかったために津波の発生が予想され、そのことは日本でも報じられた。地震発生からしばらくして、震源に近いアチェの西海岸部地域が高さ 6 メートルの津波に襲われたという情報がインドネシアの全国紙を通じて配信された。災害地域情報マッピングにも当然その情報は載せられた。ただし、災害地域情報マッピングにはそれ以外の情報も複数掲載されており、周辺地域に関する情報を見てみると、どれも 6 メートルの津波には襲われていないことを示していた。そのため筆者らは、6 メートルの津波に関する報道に対して、実際に発生した可能性があることには十分に留意しながらも、それが現実ではない可能性も高いと考えていた。地震の翌日、6 メートルの高さの津波はなかったと報じられた。結果として筆者らの判断は妥当だったことが示されたが、これは、どの情報も漏らさずデータベースに入れなければならないと考えるのではなく、多くの情報をもとに全体像を捉えるためにデータベースを使うという考え方に基づいた判断の結果だと言える。

以上、地域研究者から災害地域情報マッピングに対して出された質問を紹介しながら、地域研究（特に人文社会系）のデータベースを開発するときにデータの扱いに関して直面しうる課題をいくつか紹介した。どちらもアチェを対象とした災害地域情報マッピングではどちらも問題にならなかったが、地域やテーマによっては考慮する必要があるのかもしれない。

２.「寺院マッピング」に込められたもの

(1)ジーン・マッピングとしての寺院マッピング

寺院マッピングとは何を目的とするものなのか。いくつかの研究発表を聞く限りでは、地域に埋め込まれた大陸部東南アジアの仏教徒の実践を比較と相関の視点で提示しようとするものであり、情報技術との関係でいえば、調査地の全ての寺院を実際に訪問し、それを地図上で表示するとともに、それぞれの寺院にいる見習僧や僧侶の出生から今日に至る経歴を聞き取り調査して得度チャートと呼ばれる図にまとめる作業などが行われてきた。

これらの調査結果から何らかのまとまった成果を引き出すには、チャートで移動をどのように表現するかといった技術的な課題に加え、僧侶の移動をもって何を明らかにするのかを説得的に示すという課題があるだろう。その際には、他の宗教を取り入れて普遍性を高めようとする方向ではなく、まず大陸部東南アジアの仏教徒世界でどのような意味を持つのかを示すことからはじめることになるだろう。そのためには、データベースや図式ではなく、既存研究の系譜を示すような古典的な先行研究紹介の形をとった方がわかりやすいかもしれない。たとえば、本プロジェクトの推進役を担う林行夫さんは、ニューズレターの第 1 号で、大陸部東南アジアについて、「この地域だけが、直接の輸入元であるスリランカ以上に今日に至るまで上座仏教を暮らしの一部として活性化しえている」と書いている。このような説明があると寺院マッピングの意味が掴みやすくなる。同様に、コーンチアムはどのような特徴を持った地域なのか、他の調査地はどうなのかなど、プロジェクトのメンバーには共有されているであろう背景的な知識が提供されることで、本プロジェクトが何を目指しているのかがプロジェクト・メンバー以外の人にも理解されやすくなるはずである。

むろん、推進役の林さんも、そのことは十分にわかっているはずだ。それにもかかわらず、林さんは、全体の方向性を明らかにする作業を脇に置いてでも、まずはデータを収集するという態度を貫こうとしているように見える。それはなぜなのか。

寺院マッピングとは、フィールドから立ち上がる調査を行うという地域研究の肝を伝えていこうとする林さんの仕掛けなのではないか。この文章が掲載される「宗教と地域の時空間マッピング ニューズレター」に、林さんが「東南アジア仏教徒社会の実践マッピングへの道程―徒然図 つれづれづ」という記事を連載している。時空間マッピングに関するニューズレターのはずなのに、林さんがこの連載で書いているのは地域研究（人類学）の方法論である。連載が進むとマッピングの技術面についての話も出てくるかもしれないが、その前に林さんがまず伝えておきたいことは、大陸部東南アジアの地域事情でも仏教徒社会についてでもなく、地域研究／人類学の方法論だということだ。その意味で、寺院マッピング・プロジェクトとは、林さんの地域研究者／人類学者としての研究者魂を後輩研究者に伝えようとするものにほかならない。寺院マッピングとは、林さんの研究者としての DNA（ジーン）を伝えひろめようとするジーン・マッピングなのである。

(2)「仏様の見えざる手」を超えて

このプロジェクトに参加している個々の研究者は、そのような林さんのジーンを確かに受

け継いでいるようである。たとえば小島敬裕さんは、ニューズレター第 1 号に寄せた記事で、中国雲南省徳宏とミャンマーで実際に調査を行うことでわかった地域ごとの「見習僧」の違いについて報告している。これは、現場に行って自分の目で見て自分で体験することから地域を掴もうとする林さんの方法を実践した報告にもなっている。

ところで、林さんのジーンを受け継ぐということは、それを取り入れた上で、どのようにしてそれをよい意味で裏切っていくのかが問われるということでもある。その萌芽は、すでにニューズレターの既刊号の記事などに見られるように思われる。

> 「これまで人類学者たちが少し距離をおいてきた（と私の目には映る）統計学的あるいは社会学的なアンケート調査の理論・手法などを取り入れることで、こうした主観的データを他の客観的データと同じ土俵で使えるようなデータに作りかえていくことはできないだろうか」（増原善之、ニューズレター第 1 号）
>
> 「基本的にはタイのウボン県コンチアムにおいて柴山先生と相談のうえで林先生と Pinit 先生が採用したやり方を踏襲している」が、「タイの事例を相対化したうえで共通の枠組みを設定する必要がある」（小林知、ニューズレター第 3 号）

これらの記事には、林さんの思惑を受け継ぎつつ、それをそのまま呑み込むのではなく、それぞれの関心や課題に引き付けて受け入れようと格闘している様子が見られる。この調整具合の妙は、もちろん林さんや共同研究者によって意図的に作られたものではないだろう。それを「仏様の見えざる手」の導きと見ることもできるかもしれないが、東南アジアという地域性がもたらすものと見ることも可能かもしれない。このことは東南アジア研究の意義と可能性を考えるうえで大変興味深いが、紙幅の都合もあり、別の機会に考えることにしたい。

３．得度チャートをどう読み解くか

寺院マッピング・プロジェクトでは、これまでの調査結果が情報技術によって可視化された結果がいくつか出されている。たとえば、ジュリアン・ブルドン氏の支援によるマッピングや須羽新二氏の支援によるチャート図がある。

これは、大陸部東南アジアの仏教徒社会を研究対象とする地域研究者と情報学の専門家の共同によって得られたものである。これをさらに発展させるには、得られえた図表をもとにどう読み解くのかを考える第三項の参加が必要となるだろう。そのような第三項としてまず思い浮かぶのは現地社会の人々であるが、大陸部東南アジアの仏教徒社会という文脈を理解しているという点で、現地社会の人々は地域研究者と重なる部分があり、純粋な第三項とはならないかもしれない。いっそうの飛躍を求めるには、大陸部東南アジアの仏教と社会に馴染みが薄い地域研究者がどう読み解くのか（あるいは、読み解くためにどのように図表の修正を求めるのか）という第三項を設定してもよいのではないだろうか。

そのような試みとして、以下では、大陸部東南アジアの仏教徒社会について専門的知識を持たない立場から、「報告書」の 13 ページと 14 ページに掲載されている得度チャートを頼りに、筆者がそれらをどのように読み解くか（あるいは、読み解くためにどのような工夫が必要と考えるか）について、いくつかの考えを述べてみたい。

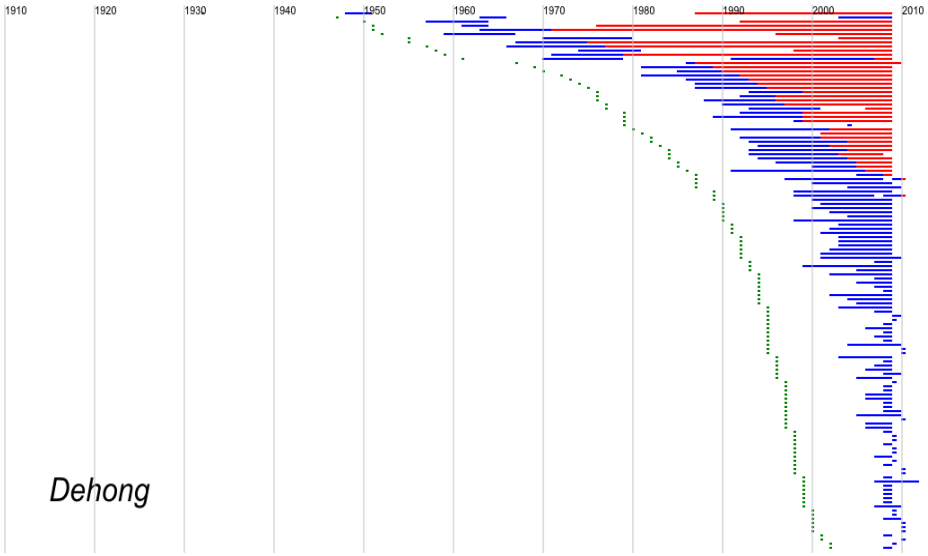

図 2：得度チャートの一例（中国雲南省徳宏の出家者）

(1)個人の配列の基準

それぞれのチャートにおける個人の配列の基準は何か。生年を示す緑色のドットを見ると、生年が早いものから順に並べられているようだが、生年が同じ人どうしではどのように並べられているのか。調査順、名前順、生年月日順などいくつかの基準が考えられるが、それらのうちどの基準で並べるとチャートの意味がより明確になるのかを検討してもよいのではないか。このチャートは年単位で見るところに特徴があるので、その意味をより明確にするためにも、たとえば、生年月日順ではなく生年順にして、生年が同じ場合は見習僧になった年が早い順、それも同じ場合は僧侶になった年が早い順に並べてみてはどうか。並び方を変えることで、チャート全体のかたちが違って見えるかもしれない。

(2)チャートに載っている人、載っていない人

それぞれのチャートに載っている人は誰で、載っていない人は誰なのか。たとえば Dehong（中国雲南省徳宏）のチャート（図 2）を見ると、2009 年の時点ではほぼすべての人が赤または青のドットで表示されている（つまり、見習僧または僧侶である）が、2010 年の時点ではほとんどが白（地の色）になっている。これは、2010 年については調査できた人だけ赤または青のドットで表示しているが、調査できなかった人は何も記していないために地の色で表示されているのか、それとも 2010 年にほとんどすべての見習僧と僧侶が一斉に他の地域に移ったか還俗したか亡くなったかのいずれかであることを意味しているのか。このような解釈の紛れを防ぐ工夫が必要ではないか。そのためには、たとえば、それぞれのチャートに調査年を入れることなどが考えられる。

また、2010 年の時点ではチャートに載っている人のほぼ全員が赤または青のドットで示されているということは、おそらく 2010 年にその場所を訪問して、そこにいた人々をチャートに入れたということだと思われる。それでは、例えば調査時点の 1 年前までその場所にいた

けれど調査時点では別の地域の寺にいる人は、このチャートに反映されているのか。1 年前ではなく、3 年前まで、5 年前まで、10 年前までその場所にいた人の場合はどうか。それぞれの寺に過去のすべての在籍者のリストがあればさかのぼって調べることができるだろうが、それがない場合には、全ての寺をまわり、1 人 1 人が過去にどの場所にいたかを調べて突き合わせなければならないだろう。では、現在示されているチャートは「2010 年にこの地域に見習僧あるいは僧侶としていた人」のチャートだが、それを発展させて「過去にこの地域で見習僧あるいは僧侶だったことがある人」のチャートにすることは可能だろうか。もしそれが作れれば、次の段階として、たとえば得度チャートの赤のドットを在籍地別に色分けすることなどで、得度チャートで移動が表現できるようになるかもしれない。

さらに、地域によっては出家と還俗を繰り返すということであれば、見習僧と僧侶だけ調査しても不十分であり、俗人に対しても過去にさかのぼって見習僧や僧侶としての経験を調査する必要が出てくるのではないか。つまり、3 年前までこの村で僧侶をしていたけれど今は俗人として暮らしているという人をこのチャートにどう取り込むかという問題である。これをまじめに考えると、国内のすべての男性（より厳密には、国外在住者やすでに亡くなっている人を含め、これまでに大陸部東南アジアで一定期間以上滞在したことがあるすべての男性）について同様の調査をしなければならないことになる。しかし、そのような調査が現実的でないことは明らかだろう。したがって、どのようにしたところで十全なデータに基づく得度チャートを作ることはできないということだ。むろん、そのことはこのプロジェクトで得られる得度チャートに欠陥があるということを意味しない。そうではなく、1 つ 1 つのチャートがそれぞれどのような限定の上で作られたものであるかを示すことにより、それぞれのチャートにどのような意義があるかを示すことが可能になるように思われる。

(3)チャートの比較

得度チャートが地域別に作られていることは、地域ごとの比較が想定されているためだろう。地域ごとに比較するにはスケールを共通にする必要がある。得度チャートでは、横軸では 10 年単位の年代が、縦軸は個人ごとの人数が示されている。複数の得度チャートを並べて比較するには、縦軸どうし、横軸どうしで全体の枠を揃えるか、縦軸どうし、横軸どうしで単位の大きさを揃えるかのどちらかにする必要があるだろう。すべてのチャートで全体の枠の大きさを揃えることには、その地方の最初の見習僧・僧侶が生まれて現在までを 1 つの時間単位としたときにどれくらいの段階で見習僧や僧侶が増減してきたかなどを示すなど、地域ごとの特徴を示す意味があるだろう。他方で、時間や人数の単位の大きさを揃えることで、相互に行き来がある地域間比較の道がひらかれるように思われる。

以上、寺院マッピング・プロジェクトのこれまでの研究内容をよく知らない立場から、「報告書」に掲載された得度チャートを頼りに、思いつくままに感想を書いてみた。おそらくこれらの点はプロジェクト内でも検討が重ねられており、発表媒体の制約などがあって現在の形を取らざるを得ないということだと思われるが、将来進められるであろう同様の他のプロジェクトへの参考となることを期待して敢えて記したしだいである。

連載寄稿

東南アジア仏教徒社会の実践マッピングへの道程

—— 徒然図 つれづれづ（3）

（ニューズレターNo.2 からの続き）
＜筆者の怠慢で一度お休みをいただきました。申し訳ございません＞

生活感を下敷きにする実践宗教の調査は、現場での偶然の重なりで進行する。環境や文化が異なる社会での調査では、調査対象が何であれ、また、前もって入念に計画されたものでも、現場で思い通りに運ぶことはほとんどない。想定しなかった現実に遭遇するからである。初めてそこへでかける前に一枚岩のようにイメージされていた現実は、複雑に広がりうごめく生き物なのだ。その渦中に身をおいて対象に近づく。そして、その途上で何度も繰り返す失敗や新たに出会う事態が着実に育んでいくものがある。「現地感覚」である。

正確には、現場で育まれた現地感覚が先行して、既存のものさしから外れる事態を新たな事態として初めて識別できる。現地感覚は違和感から生まれる。違和感のもとになるのは調査する側に身体化されてきた別の感覚である。それは異なる次元の現地感覚が衝突して起きる。不測の事態に直面し、焦りやジレンマ、ときには精神的な痛みを経て初めて姿をあらわすものこそ、調査者の事前の考えや行動を当然にして自明なことのように思わせ、それを育んだ環境で生きていく限りでは自覚されることも、その必要もない common sense（「常識」ないし「共通感覚」）である。

滞在日数の長短は、必ずしも調査の質の善し悪しを決める条件ではない。彼我の「常識」の違いに直面して生じる文化衝撃や心痛を避け、自分が生まれ育った環境で得た「常識」や感覚に無自覚なまま相手の「常識」に思いをよせようとしない長期滞在者は数多くいる。とはいえ、経験的な調査研究の「初動」にとって基本的なこと＝現地の人がわたしに発したことばは自分との関係をどのようにとらえたうえでの発語か、それはどのようなあちらの「常識」にもとづくのか、どうすれば双方の会話が弾み、互いに「同期」できるのか等＝についておよその見通しがつくようになるには、現地語の語彙だけでなく、その生きた使われ方をみるために多くの人々との出逢いや、やりとりの輪の中に身をおくしかない。滞在期間が長ければ、そしてその人にその意志があれば、その機会も増える。

とはいえ、現地感覚を養うための長い時間を要する調査は、繰り返し何度も行えるものではない。研究職に就いても、組織内での役割や責任が増えるとともに激減する。わたしは、

1981 年からのタイ留学中での長期調査（～1983 年）のあとのほとんどの渡航は科研費による調査だった。1988 年 4 月以来、調査研究にはもっとも恵まれた複数の機関に籍をおかせていただいたが、海外事務所の駐在を別にすると、調査目的での 2 ヶ月以上の渡航は、1994 年 8 月から 10 月までのカンボジアの調査が最後である。自らの科研（基盤研究 A）をのちに組織する僥倖を得ても、職場での講義や会議、そして前世紀末より爆発的に増加した管理業務、さらにライフコース上の私情が重なって、二週の渡航が関の山という事態に陥った。その科研による全渡航日数は三年間でわずか 2 か月足らずに終わった。

つい先頃、「退職してこれほど研究に専念できるとは思わなかった、もっと早く辞めればよかった」とおっしゃった京大名誉教授がいる。私情だけではなく、海外での調査研究を柱にすえる大学研究機関をめぐる昨今の状況は、数ヶ月におよぶ出張が許された先輩諸氏の時代を確実に古き良き過去とし、いろんな意味で深刻になっている。事態は改善されそうにない。さらに危惧すべきは、このような「空気」が法人化後の制度下の教員のみならず、限られた時期に現地感覚を養わなければならない若い世代にもおよんでいることである。かつて必須とされた 1 年から数年におよぶ海外での留学や調査は、研究を標榜する大学院でも、学位の量産体制のために自明なことではなくなりつつある。

こうした現況から過去をふりかえると、今日もなお自分の研究の視角や人生に深い影響を与えている調査経験の多くが、留学期をふくむ 80 年代、そして 2、3 か月の調査を繰り返した 90 年代半ばまでのものであったことに気づく。職業として研究を続けるうちにいくつもの現地感覚が育つわけであるが、同時に、それらはそれぞれ別の経験にもとづきながら、最初の 80 年代に鋳込まれた現地感覚と切り離れたものであるどころか、その感覚を心身のおおきな柱として育くんできたことにも思い当たる。

21 世紀以降は教員として週単位の短期渡航を繰り返すうち、若い人々には、慌ただしく往来してマイレージがたまるだけの腰掛け調査ではなく、可能な限り長期滞在調査を経験すべきと痛切に思い始めた。1996 年 4 月から 2010 年 3 月まで担当したゼミで、院生諸氏には、国内で開催される学会をのぞきにくるような一時帰国もせず、1 年から 2 年は調査地を第二の生地としてどっぷり浸かることを強く奨めた。偶然にも、その時期は冷戦体制の雪解けが進み、数十年にわたって入国できなかった国や地域が、外国人にたいして扉を開く市場開放の幕開けと重なっていた。そして幸いにも、カンボジア、ラオス、中国云南省徳宏の各地で長期滞在して調査経験を積む人たちが切れ目なく続いた。

冷戦体制下でも、これらの地域や国での見聞を伝える者がなかったわけではない。しかし、正式な許可を得て受入機関に入り、当地で現地語を習得し、官民の双方に知己を得てなお自分が居座る場所への道を忍耐強くたぐりよせた点では、彼ら／彼女らが、冷戦体制後の生活感をもつ最初の研究者世代となった。そして、少なくとも東南アジア大陸部上座仏教徒社会研究に限れば、スパイロやメンデルスン、タンバイアや石井米雄らの先学が築いたビルマと

タイの研究の上に、ながく空白部分をなしてきた地域での集約調査の成果が加えられることになった。それ以上に、そうした国別、地域別での成果を軸としつつ、大陸部仏教徒社会全域の比較研究を展開する可能性がみえてきた。すなわち、冷戦体制の前はもちろん、イギリスやフランスがにらみあっていた植民地時代にもありえなかった調査研究の環境が大陸部東南アジアに出現したのである。

2006 年からラオスと国境を接する東北タイの一地域から始まり、2008 年度から 2010 年度まで科研を得て調査対象地域を西南中国（西双版納、徳宏）をふくむ東南アジア上座仏教徒社会に拡大した「寺院マッピング・プロジェクト」をたちあげた背景には、このような制度的にして研究者をとりまく時代と環境の変化があった。同時に、前述した現地感覚に依拠しながら現況のような研究環境（職場）で実施可能な実践宗教の研究プロジェクトとして構想されなければならなかった。

2006 年の最初の調査地を東北タイにしたのは、後述するようにさまざまな理由があるが、技術的な観点では、短期間での広域調査となるため、長らく慣れ親しんだ地域の現地感覚が運用しやすく、組織づくりも調査効率もあがると判断したためである。

広域調査は、ある主題について複数の集落や地域での概況をつかむ予備調査と似ているが、長期定着調査の経験が先行してこそ意義をもつ調査である。人々と寝食を共にした時空間、人々の行いについての見通しがつく経験があれば、それを「ものさし」にして他村や他の地域でのデータ収集と比較ができる。広い範囲で実践宗教の現実に迫るには、調査者の目には珍しくなくなっているモノ（寺院や祠などの宗教施設）や出来事（出家行動）のような指標とともに、それらを評価する現地感覚が必須となる。当初は限定的で微弱な触覚は、比べながら移動する調査者の視界を広め、それまで自分が拠点としてきた時空間や経験を新たな地平で捉えなおす眼力をつくっていく。それが広域調査である。

2008 年度から拡大したプロジェクトの参加者は、科研の分担者であれ協力者であれ全員が１年から２年の集約調査やそれ以上の年数におよぶ現地滞在経験者だった。これは広域調査がメインになるプロジェクトの要請条件でもあった。

また、このプロジェクトは「マッピング」をもうひとつの柱としている。寺院マッピングとは、どのような意味をこめていたのかについて、以下に述べておきたい。

自ら組織して運営すると痛感するが、わたしをひきつけてきた研究は、過去の自分自身の調査経験さらには調査で出逢った現地の人々との出逢い、そしてことばによって惹起されていることに気づく。マッピングも、真新しい「地域情報学」で注入されたというより、その構想やめざそうとするものを含めると、寺院施設と出家者を指標にしてカンボジアの仏教復興を検証しようとした 1994 年の調査が、本プロジェクトの呼び水にして引き金となっていた。

もっとも、当時は「地図」をデータや記録を保蔵する補助具としていた点で、現プロジェクトでの地図の機能とは対極をなす。しかし、歩いて探すという手法においては寺院マッピング・プロジェクトの原型であった。

1992 年 12 月 8 日、ラオス南部で第 4 腰椎と肋骨 8 本を折る交通事故に遭遇した。半年間のリハビリを終えて、調査に復帰したのが初めてのカンボジアであった。タイやラオスでのように現地語を使う調査ができないので、カンボジア＝英語の通訳を帯同しての踏査である。この経験は、その後とそれまでの調査研究を見直す重要な機会となった。西南中国の云南省西双版納のように出家者を強制還俗させるに止まらず、処刑対象としたカンボジアの仏教の復興過程を検証することが課題だった。

前年 1993 年に続いて二度目だったが、役所にはポル・ポト以前の古い寺院施設の名称だけを記した書類はあっても所在地を示すデータも地図もなく、文字通りプノンペン市管轄区内の寺院施設を訪れるため、一寺ずつあちこちで住人に所在をたずねるという、まことに効率の悪い手探り調査だった。だが、初めてのタイやラオスで行ったように、訪れた 70 ほどの寺院で愚直なまでに同じ質問を繰り返すうち、さまざまなことに出会った。そして想定もしなかった展望が開けてきた。それが 1994 年、二度目のカンボジアでの調査だった。忘れがたい経験がそうであるように、事前に予想もしえなかったかたちでタイから脚を伸ばしたラオスや西双版納を繋ぎ、最も初期の東北タイ農村での調査経験を新たな地平で捉え直させてくれるものとなった。

特定区画内の寺院施設をすべて訪れ、寺院の修復や出家の恢復がいつから始まったのかについて、訪問した寺院と近くの集落で同じ質問をして回ることを繰り返した。1994 年は、現地で悪名高かった国連軍 UNTAC が引き揚げる年で、彼らのスーツケースや古着とともに、裏面に top secret と刻印した地図が市場の複数の店舗にばらまくようにして払い下げられていた。これを買い集めた。車の距離メータをセットして、たどりついた寺院をその地図上に落とした。訪問先では同じ質問をなんども繰り返した。そして問いにたいする回答だけではなく、予想もしない事実を見聞することになる。とくに、得度式の再興について歴史の闇に消えいろうとする事実を知った。その人物とも会えた。「私度」とはなにかを今も考えている。つまり実践仏教の核心にかかわる今日に続く問題群を得た。

この 1994 年から、わたしは日誌をデジタルで記しはじめている。もとはフィールドノートとは別の、主観を交えた感想や思いついたアイデアの備忘録である。読んだ文献の読後感やコメントをかきこむためにも使っていた。そのうち、手紙やファックスもワープロでかくようになり、やがて内容別にフォルダをつくってもすぐにみつけだせなくなったため、「超整理法」にちなみ、時系列的にすべての事項をうちこむようになった。日々刻々の記録は 19 年目となってなんでも検索できる。試しにマッピングという語で検索してみた。なんと初出は

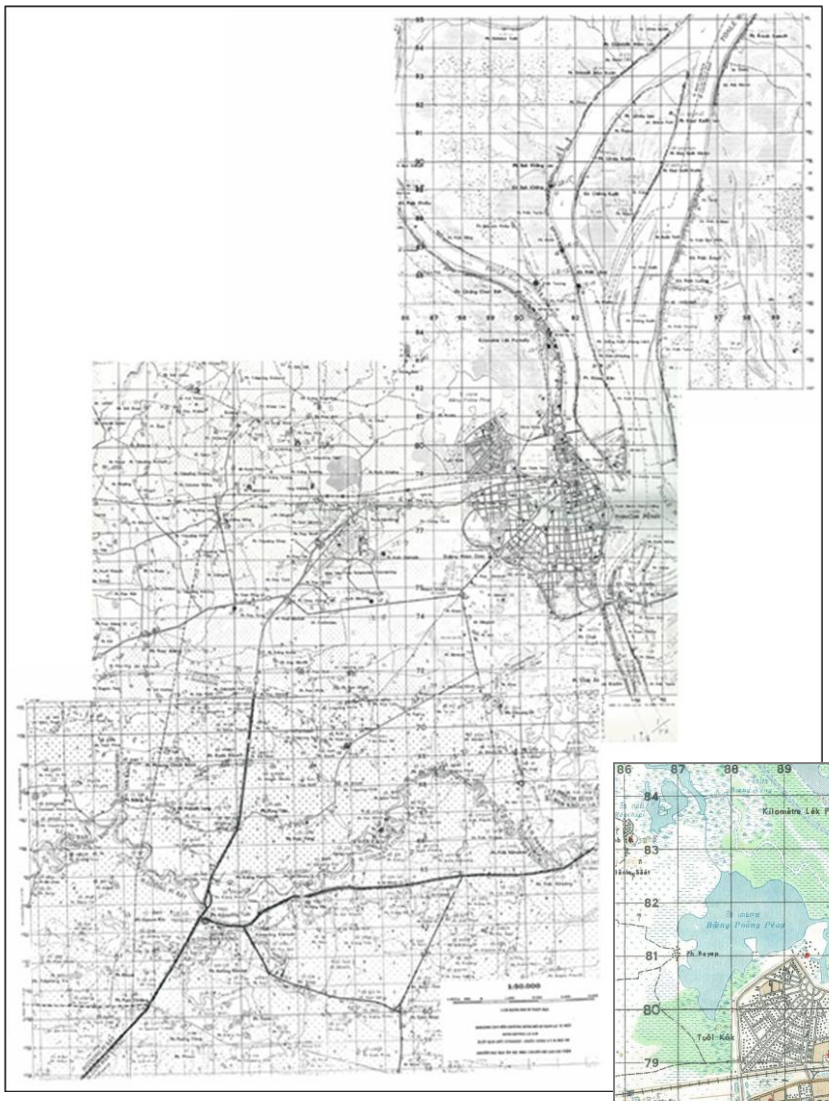

図 1：85 か所を探索訪問した「プノンペン市管轄寺院施設」の所在分布。同市を中心に南北の近郊農村に広がる（1994 年 9 月）

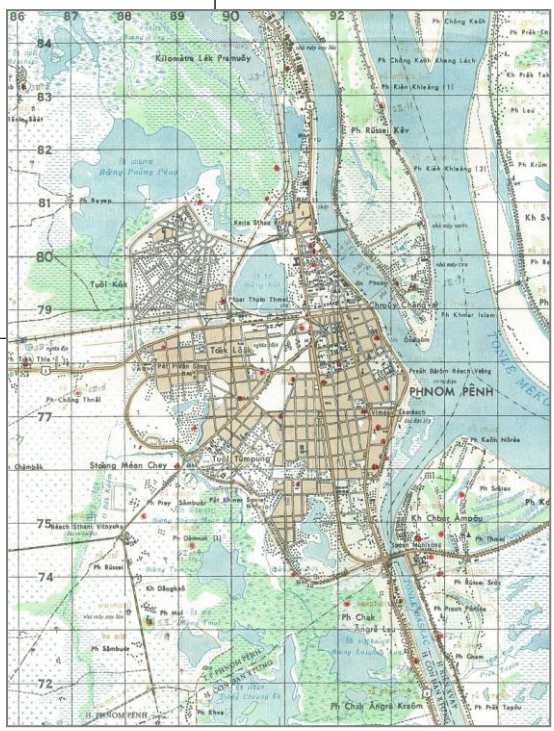

図 2：プノンペン市は約 30 施設（赤点）、残る 50 余りが近郊農村に立地していた

1994 年 10 月 7 日に故石井米雄先生へあてた手紙であった。カンボジアでの調査を終えて 2 日後である。石井先生は一昨年 2 月に鬼籍に入られた。以下、多少長くなるが、そのまま転載する。

１９９４年１０月７日

石井 米雄 先生

拝復

ごぶさたいたしております。先生には、お変わりございませんか。

小生、カンボジアでの調査を終え、お蔭さまをもちまして、一昨日無事に帰国いたしました。

小生の出張中に、前年度（９３年度）調査の粗雑な報告についてのコメントをいただき、誠にありがとうございました。表記はさっそく、訂正することにいたします。ＩＡＨＡを控えられ猛烈にご多忙な御身にもかかわらず、早々にお目通ししていただき、感謝にたえません。心よりお礼もうしあげます。

今回の最終調査は、現地からもお便りさしあげましたように、雨なし酷暑の日本とは一転、連日の雨と洪水にたたられどおしのフィールド・サーヴェイとなりました。「地方農村は危険だから」という受け入れ側の要望もあったので、それならプノンペン市管轄の全寺院（昨年より増加して８５か寺）を対象に、余裕をもって復旧の過程と現状を調べようとしました。ところが、（当局には分布図はおろか、正確な位置確認がなされていないので）**実際に一寺ずつ訪ねてマッピングを開始して**初めてわかったのですが、市内に集まる寺院は３０ほどで、他はほとんど近郊農村に散らばっているのです。最初に位置を確認したまではよくても、二度目に訪ねてでたときは、豪雨による洪水で通路は寸断、ボートでないとアクセス不可能というところがでてきました。結局、余裕たっぷりどころか、全日程で休みは三日だけと動き回ったにもかかわらず、誠に悔しいことに、聞き取りを実施できたのは７２か寺にとどまりました。踏査しえなかった寺院については、別の方法でそれなりの情報収集はいたしました。

まったく能率の悪い、いつもの手探りパタンで始めた仕事でしたが、７９年以降の寺院の復興状況や儀礼関係のネットワークなどが徐々にみえてくると同時に、「正式な」得度式の復活経緯について、思わぬ事実と出会うことになりました。確かに、前回調査での聞き取りでも、今回恵贈していただいた文献や他の関連文献にも、カンボジア仏教は７９年９月に７人の僧侶から再出発したことは間違いありません。ですが、その数カ月前の同年４月７日に、当時の政府公認の出家式が行われていました。仏像の前において、受戒の儀を実施しているのです。「公認」の授戒師も、ウナロム寺におわすモハニカイの大僧正テップ・ヴォン師ではなく、ヌル・モニーという僧侶がポル・ポト時代後に生まれた最初のウパチヤーです。彼はプノンペン市郊外にある Wat Sansom Kosal（当時、市内の状態のましな寺院はほとんどヴェトナム軍が駐留していた)、において他に４人の僧侶とともに「受戒」しています。そして、ヌル・モニー師はこの寺にとどまり、他の４名の僧侶は出家してすぐ、それぞれカンダール、スヴァイリエン、コンポンスプー、タケウへと散っています。

同年９月に彼の出家が無効であり、再得度をせよと宣されるまで、ヌル・モニーは授戒師として１０００人ほどの得度式を司式しました。そのときのチャイヤー（僧籍身元確認証）を今日も保管する僧侶もいます。興味深いのは、ヌル・モニーは９月にウナロム寺で実施されたクマエ・クラオム７名（実際にその時に到着した僧侶数は２１名）の僧侶による正式の得度式を拒否したために、三年近くウナロム寺に「幽閉」され、のちに還俗してしまったことです。ちなみに、彼をウパチヤとして出家した僧侶のほとんどは、９月に正式なウパチヤとなったテップ・ヴォン師のもとで再出家しています。

こうしたことが、現在、寺院に止住する老僧の出家行動を聞いて行くうちに明らかになり、なんとしてもこの人物と会いたいと思い始めるものの、居所をあちこちで聞いても誰も知らない。諦めかけもしましたが、最後には誠に幸運にもつきとめ、直接会って話を聞くことができました（その日の朝、彼を前にした小生の

手はがたがた震えておりました)。ポル・ポト時代以前には１６歳でコンポンチャムの寺院で見習僧に、プノンペン市の名寺モハーモントライで比丘となってからは、コンポンチャムにもどって長く住職を務め、７３年から７５年まではウナロム寺に止住していた長期出家者です。現在、７２歳の彼は大変なナショナリストでした。クメールの仏教はベトナムの力を借りてすることではなく、得度式そのものは儀に適ったものではなかったにせよ、今でも自分は正しく、ウナロムから再開された仏教こそは真の仏教秩序（thoamacha; phutthacha）ではなく、世俗秩序（anacha）に迎合して生まれた誤った仏教である、と静かに語りました。制度としての仏教を考える上で、小生には大変興味深い一瞬でした。

それにしても、彼のこうした考えをよそに、ものすごい勢いでカンボジア仏教は復興しているように思えました。寺院によって差はありますが、前回訪れた時には実にシャビーだったプラウィヒーヤに、まぶしいような立派な屋根がのっていました。また、今回、調査対象とした寺院にあっては、１４の仏教初等学校 sala rien putthika machiyom sukusa が実際に運営されるに至っております。また、昨年から宗教省内に設置された年間百人の入学者を受け入れている仏教中等学校 putthika machiyom suksa も順調に二年度目を迎え、現在１９８名が学んでいます。二年後に卒業生が生まれるその時に初めて仏教大学が始動するということです（ただし、現時点では場所も建築物も存在しません)。たった一年でこうもすばやく変わるのか。なぜなのか。そうしたことを、９月中旬から始まったカンボジア仏教儀礼最大の年中行事、１５日間に及ぶパチュンバンに参加しながら考えておりました。

もっとも、同時進行で問題もでているようです。復活したトアンマユット派とモハーニカイ派のめだった「確執」とまでは行かないまでも、ぎくしゃくした関係をいくつか散見することがありました。元トアンマユットの寺院がポル・ポト体制後の現在、ほとんどモハーニカイ派の僧侶が占めているという状況が背景にあります。宗教省内でもこのことは話題になっています。

蒐集した資料はこれから整理し、基礎資料中心の報告論文としてまとめたく思っています。前回調査の報告は、大幅にリライトする必要を感じています（授業でお使いになるなどとは、とんでもありません。身も凍る話です)。小生はカンボジアについては素人ですので、できれば、サンガ・俗人組織の編制を中心に、現在の模範的制度中心であるタイ、および、カンボジア同様に伝統実践を遮断された経緯をもつ、西双版納の仏教を比較しうるような展望のなかで、僅かでも将来の調査研究につながる議論を提出できれば、と愚考しています。また、その節には、なにとぞよろしくご教示ご鞭撻のほど、心からお願い申しあげます。

お礼と帰国のごあいさつのつもりが、とんでもない長い手紙になってしまいました。ご容赦ください。ご参考までに、宗教省および内務省管轄のプノンペン市宗教課（monti thoammaka nung sasana reachtheani Phnom Penh）で得た資料の写しを同封いたします。４枚からなる後者は、調査時期が今年の入安居後のものとされていますが、小生同様雨にたたられていて未完了ですので、署名がありません。また、各寺院ごとの数値は、小生が実際に調べたものと異なるものが多々ありますので、ご注意ください。

最後になりましたが、時節柄、呉々もご自愛ください。

敬 具

林　行夫

(次号へ続く)

＊　＊　＊　＊　＊

マッピング資料室

東京外国語大学・土佐桂子先生から科研「大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング」で使用された文献資料のリストをお送りいただきました。本ニューズレター第 2 号の土佐先生のご報告「ミャンマーにおける僧院と出家者の移動」を補完するものとご理解ください。

① 1992 年称号授与---アビダザなど

သာသနာရေး ဦးစီးဌာန။၁၉၉၂။
၁၃၅၃(၁၉၉၁-၂)ခုနှစ် ပြည်ထောင်စုမြန်မာ နိုင်ငံတော် နိုင်ငံတော်ငြိမ်ဝပ်ပိပြားမှုတည်ဆောက်ရေး အဖွဲ့က ဆက်ကပ်လှူဒါန်းခဲ့သည့် အဘိဒဇမဟာရဋ္ဌဂုရု နှင့် အဂ္ဂမဟာပဏ္ဍိတ ဘွဲ့တံဆိပ်တော် ရ ဆရာတော်ကြီးများအားပြည်ထဲရေးနှင့်သာသနာရေးဝန်းကြီးဌာနဝန်ကြီးဒုတိယဗိုလ်ချုပ်ကြီးဘုန်းမြင့်က ဘွဲ့တံဆိပ်တော်များ ဆက်ကပ်ပူဇော်ပွဲအခန်းအနားအစီအစဉ် နှင့် ဘွဲ့တံဆိပ်တော် ရ ဆရာတော် အရှင်မြတ်များ ၏ထေရုပ္ပတ္တိများ။ ရန်ကုန်။ သာသနာရေး ဦးစီးဌာန။
TUH (Thathanaye Usi Htana) 1992
1353 (1991-2) hkunhnit Pyihtaungsu Myanma Naingngantaw Naingngantaw Nyeinwut Pipyahmu Tehsaukye Ahpwe ka hsekket hludan hke thi Ahbidaja Maha Rataguru hnin Egga Maha Pandita hbwe tanhseiktaw ya hsayatawkyimya a Pyihteye hnin thathanaye wunkyihtana wunkyi Dutiya Bohkyokkyi Hbon Myint ka hbwe tanhseiktaw mya hsekkat puzawpwe ahkanana asiasin hnin hbwetanhseiktaw ya hsayataw ashinmyat i hteruppattimya. Yangon, Thathanaye Usi Htana.
宗教局 1992
『緬暦 1353 年（1991-2 年）ミャンマー連邦国家法秩序回復評議会が授与したアビダザマハーラッタグルとエッガマハーパンディタ称号を得た僧正に対して、内務宗教省大臣第二上級将軍ポンミンが称号を授与した儀礼の式次第と称号を得た僧正の経歴』ヤンゴン、宗教局。

② 1992 年称号授与---布教・瞑想系

၁၃၅၃(၁၉၉၁-၂)ခုနှစ် ပြည်ထောင်စုမြန်မာ နိုင်ငံတော် နိုင်ငံတော်ငြိမ်ဝပ်ပိပြားမှု တည်ဆောက်ရေးအဖွဲ့က အသစ်တီထွင်ပြဋ္ဌာန်းဆက်ကပ်လှူဒါန်းခဲ့သောသာသနာပြုဘွဲ့တံဆိပ်တော် နှင့် ကမ္မဋ္ဌာန်းနည်းပြဘွဲ့၊သာသနာနုဂ္ဂဟဘွဲ့တံဆိပ်ရ ဆရာတော်များ နှင့် လူပုဂ္ဂိုလ်တို့၏ထေရုပ္ပတ္တိများ။ ၁၉၉၂
TUH (Thathanaye Usi Htana) 1992
1353 (1991-2) hkunhnit Pyihtaungsu Myanma Naingngantaw Naingngantaw Nyeinwut Pipyahmu Tehsaukye Ahpwe ka athit tihtwinpyatan hsekket hludan hke thaw Thathanapyu hbwe tanhseiktaw hnin Kammahtan nyipya hbwe Thathana Nuggaha bwe tanhseiktaw ya hsayataw mya hnin lu pokgo to i hteruppatti mya. Yangon, Thathanaye Usi Htana.
宗教局 1992

『緬暦 1353 年（1991-2 年）ミャンマー連邦国家法秩序回復評議会が新規設置し、授与した仏教布教称号と瞑想教師、ターターナーノゥガハ称号を得た僧正、在家の経歴』ヤンゴン、宗教局。

③ 1992 年称号授与---説法系 (1)

သာသနာရေး ဦးစီးဌာန။၁၉၉၂။

၁၃၅၃(၁၉၉၁-၂)ခုနှစ် ပြည်ထောင်စုမြန်မာ နိုင်ငံတော် နိုင်ငံတော်ငြိမ်ဝပ်ပိပြားမှုတည်ဆောက်ရေး အဖွဲ့က ဆက်ကပ်လှူဒါန်းခဲ့သည့်ဂန္ဆဝါစကစာချဘွဲ့တံဆိပ်တော် နှင့် ဓမ္မကထိကဘွဲ့တံဆိပ်တော်ရ ဆရာတော်အရှင်မြတ်များ၏ထေရုပ္ပတ္တိများ နှင့် သီလရှင်ဆရာကြီးများ ၏ထေရုပ္ပတ္တိများ။ ပထမတွဲ။ ရန်ကုန်။ သာသနာရေး ဦးစီးဌာန။

TUH (Thathanaye Usi Htana) 1992

1353 (1991-2) hkunhnit Pyihtaungsu Myanma Naingngantaw Naingngantaw Nyeinwut Pipyahmu Tehsaukye Ahpwe ka hsekket hludan hke thi Ganhtawasaka sahkya hbwe tanhseiktaw hnin Dhamakahtika hbwe tanhseiktaw ya hsayataw ashinmyatmya i hteruppattimya hnin thilashin hsayakyi mya i hteruppattimya（Pahtama twe）. Yangon, Thathanaye Usi Htana.

宗教局 1992

『緬暦 1353 年（1991-2 年）ミャンマー連邦国家法秩序回復評議会が授与したガンダワーサカ教法師と説法師の称号を得た僧正の経歴とティラシンの経歴（第一巻）』ヤンゴン、宗教局。

④ 1992 年称号授与---説法系 (2)

သာသနာရေး ဦးစီးဌာန။၁၉၉၂။

၁၃၅၃(၁၉၉၁-၂)ခုနှစ် ပြည်ထောင်စုမြန်မာ နိုင်ငံတော် နိုင်ငံတော်ငြိမ်ဝပ်ပိပြားမှုတည်ဆောက်ရေး အဖွဲ့က ဆက်ကပ်လှူဒါန်းခဲ့သည့်ဂန္ဆဝါစကစာချဘွဲ့တံဆိပ်တော် နှင့် ဓမ္မကထိကဘွဲ့တံဆိပ်တော်ရ ဆရာတော်အရှင်မြတ်များ၏ထေရုပ္ပတ္တိများ နှင့် သီလရှင်ဆရာကြီးများ ၏ထေရုပ္ပတ္တိများ။ ဒုတိယတွဲ။ ရန်ကုန်။ သာသနာရေး ဦးစီးဌာန။

TUH (Thathanaye Usi Htana) 1992

1353 (1991-2) hkunhnit Pyihtaungsu Myanma Naingngantaw Naingngantaw Nyeinwut Pipyahmu Tehsaukye Ahpwe ka hsekket hludan hke thi Ganhtawasaka sahkya hbwe tanhseiktaw hnin Dhamakahtika hbwetanhseiktaw ya hsayataw ashinmyatmya i hteruppattimya hnin thilashin hsayakyi mya i hteruppattimya（Dutiya twe）.Yangon, Thathanaye Usi Htana.

宗教局 1992

『緬暦 1353 年（1991-2 年）ミャンマー連邦国家法秩序回復評議会が授与したガンダワーサカ教法師と説法師の称号を得た僧正の経歴とティラシンの経歴（第二巻）』ヤンゴン、宗教局。

⑤ 1993 年称号授与---アビダザなど

သာသနာရေးဦးစီးဌာန ၁၉၉၃။

၁၃၅၄(၁၉၉၃)ခုနှစ် ပြည်ထောင်စု မြန်မာနိုင်ငံတော် နိုင်ငံတော် ငြိမ်ဝပ်ပိပြားမှု တည်ဆောက်ရေးအဖွဲ့က ဆက်ကပ်လှူဒါန်းခဲ့သည့် အဘိဒဇမဟာရဋ္ဌဂုရု နှင့် အဂ္ဂမဟာပဏ္ဍိတဘွဲ့ တံဆိပ်တော်ရ ဆရာတော်ကြီး များအား သာသနာရေးဝန်ကြီး ဌာန ဝန်ကြီးဗိုလ်ချုပ်မျိုးညွန့်က ဘွဲ့ တံဆိပ်တော်များ ဆက်ကပ်ပူဇော်ပွဲ အခန်းအနားအစီးအစဉ် နှင့် ဘွဲ့တံဆိပ်တော်ရ ဆရာတော် အရှင်မြတ်တို့ ၏ထေရုပ္ပတ္တိများ။ ရန်ကုန်။ သာသနာရေး ဦးစီးဌာန။

TUH (Thathanaye Usi Htana) 1993

1354 (1993) hkunhnit Pyihtaungsu Myanma Naingngantaw Naingngantaw Nyeinwut pipyahmu Tehsaukye Ahpwe ka hsekket hludan hke thi Ahbidaja Maha Rataguru hnin Egga Maha Pandita hbwe tanhseiktaw ya hsayatawkyimya a Thathanaye wunkyihtana wunkyi Bohkyok Myo Nyunt ka hbwetanhseiktaw mya hsekkat puzawpwe ahkanana asiasin hnin hbwetanhseiktaw ya hsayataw ashinmyat i hteruppattimya. Yangon, Thathanaye Usi Htana.

宗教局 1993

『緬暦 1354 年（1993 年）ミャンマー連邦国家法秩序回復評議会が進呈したアビダジャマハーラッタグルとエッガマハーパンディタ称号を得た僧正に宗教省大臣ミョーニュン将軍が行った称号授与式の式次第と上記称号を得た僧正の伝記』ヤンゴン、宗教局。

⑥ 1993 年称号授与---布教・瞑想系

သာသနာရေးဦးစီးဌာန ၁၉၉၃။

၁၃၅၄(၁၉၉၃)ခုနှစ် ပြည်ထောင်စု မြန်မာနိုင်ငံတော် နိုင်ငံတော် ငြိမ်ဝပ်ပိပြားမှု တည်ဆောက်ရေးအဖွဲ့က အသစ် တည်ထွင်ပြဋ္ဌာန်း ဆက်ကပ်လှူဒါန်းသော သာသနာပပြု ဘွဲ့တံဆိပ်တော် နှင့် ကမ္မဋ္ဌာန်း နည်းပြ ဘွဲ့ တံဆိပ်တော်ရ ဆရာတော် များ၏ ထေရုပ္ပတ္တိကထာ။

ရန်ကုန်။ သာသနာရေး ဦးစီးဌာန။

TUH (Thathanaye Usi Htana) 1993

1354 (1993) hkunhnit Pyihtaungsu Myanma Naingngantaw Naingngantaw Nyeinwut pipyahmu Tehsaukye Ahpwe ka athit tehtwinpyatan hsekket hludan thaw Thathanapyu hbwe tahseiktaw hnin Kammahtan nyipya hbwe tanhseiktaw ya hsayataw mya i hteruppattikahta. Yangon, Thathanaye Usi Htana.

宗教局 1993

『緬暦 1354 年（1993 年）ミャンマー連邦国家法秩序回復評議会が新たに設け進呈する仏教布教称号と瞑想指導称号を得た僧正の伝記物語』ヤンゴン、宗教局。

⑦ 1993 年称号授与---説法系（1）

၁၃၅၄(၁၉၉၃)ခုနှစ် ပြည်ထောင်စု မြန်မာနိုင်ငံတော် နိုင်ငံတော် ငြိမ်ဝပ်ပိပြားမှု တည်ဆောက်ရေးအဖွဲ့က ဆက်ကပ်လှူဒါန်းခဲ့သည့် ဂန္ဆဝါစကစာချဘွဲ့တံဆိပ်တော် နှင့် ဓမ္မကထကဘွဲ့ တံဆိပ်တော်ရ ဆရာတော် အရှင်မြတ်တို့ ၏ထေရုပ္ပတ္တိများ (ပထမတွဲ)။ ရန်ကုန်။ သာသနာရေး ဦးစီးဌာန။

TUH (Thathanaye Usi Htana) 1993

1354 (1993) hkunhnit Pyihtaungsu Myanma Naingngantaw Naingngantaw Nyeinwut pipyahmu Tehsaukye Ahpwe ka hsekket hludan hke thi Ganhtawasaka sahkya Hbwe tanhseiktaw hnin Dhamakahtika hbwetanhseiktaw ya hsayataw mya i hteruppattimya（Pahtama twe）. Yangon, Thathanaye Usi Htana.

宗教局 1993

『緬暦 1354 年（1993 年）ミャンマー連邦国家法秩序回復評議会が進呈したガンダワーサカ仏教説話師称号と仏法講師称号を得た僧正の伝記（第一巻)』ヤンゴン、宗教局。

⑧ 1993 年称号授与---説法系（2）

သာသနာရေးဦးစီးဌာန ၁၉၉၃။

၁၃၅၄(၁၉၉၃)ခုနှစ် ပြည်ထောင်စု မြန်မာနိုင်ငံတော် နိုင်ငံတော် ငြိမ်ဝပ်ပိပြားမှု တည်ဆောက်ရေးအဖွဲ့က ဆက်ကပ်လျှဒါန်းခဲ့သည့် ဂန္ထဝါစကစာချဉ်တဲ့တံဆိပ်တော် နှင့် ဓမ္မကထကဉ် တံဆိပ်တော်ရ ဆရာတော်အရှင်မြတ်တို့ ၏ထေရုပ္ပတ္တိများ (ဒုတိယတွဲ)။ ရန်ကုန်။ သာသနာရေး ဦးစီးဌာန။

TUH (Thathanaye Usi Htana) 1993

1354 (1993) hkunhnit Pyihtaungsu Myanma Naingngantaw Naingngantaw Nyeinwut pipyahmu Tehsaukye Ahpwe ka hsekket hludan hke thi Ganhtawasaka sahkya hbwe tanhseiktaw hnin Dhamakahtika hbwetanhseiktaw ya hsayataw mya i hteruppattimya（Dutiya twe）. Yangon, Thathanaye Usi Htana.

宗教局 1993

『緬暦 1354 年（1993 年）ミャンマー連邦国家法秩序回復評議会が進呈したガンダワーサカ仏教説話師称号と仏法講師称号を得た僧正の伝記（第二巻)』ヤンゴン、宗教局。

* * * * *

掲示板

研究報告「寺院マッピング―見えないものを写像する」・・・地域研究統合情報センターワークショップ『情報をつなぐ、世界をつかむ―地域情報学で変わる地域研究』（H240428）での発表（林 行夫）

平成 24 年 4 月 28 日春爛漫の土曜日、京都大学地域研究統合情報センター（地域研）主催の共同研究ワークショップ『情報をつなぐ、世界をつかむ―地域情報学で変わる地域研究』が開催され、その「研究報告 3」として「寺院マッピング―見えないものを写像する」と題する報告を行った。昨年度開催した同じ地域研主催のワークショップ（平成 23 年 4 月 23 日）『＜地域の知＞の可能性―地域研究の視点から』では、「＜宗教＞をどう測量るか」と題して寺院マッピング・プロジェクトを紹介したが、内容は『マッピングデータ集成Ⅰ』にこぎつけるまでの経過報告にとどまっていた。

今回は、ジュリアン、須羽両氏のご尽力で進捗をみたマッピング・システム（プロトタイプ）と「得度チャート」の紹介をメインに、臨地調査で得たデータをいかに統合して保蔵しつつあるか、データをどのように可視化しつつあるか、そして、可視化されたものを前にしていま、何がみえはじめているのかを伝えた。得度チャートは明瞭な出家傾向の地域差をみせる。同時に、複数地域を繋ぐような傾向もみえてくる。場所と個人を繋ぐものとして出家者の移動経路を示すデバイス（トラッキングルート）の開発を進め、さらに一見脈絡がないようにみえる他のデータとの照合もできるようにしつつある。また、データを集積し、可視化することで浮き彫りにされつつあるプロジェクト内の発見を報告するとともに、こうした

道具だてが他の宗教研究にも利用できることにも言及した。あらゆる宗教施設はある地域の空間に生じ、そこに関わってきた人々の行いが関与する（得度チャートが示す出家行動もそのひとつ)。地理情報を与える宗教施設とは、人々の宗教実践の集積体でもある。また、施設は単体では空間指標にすぎないが、複数並ぶと時間指標になる。出家行動も、個人単位でみれば時間指標だが複数束ねていくと空間指標となる。この両者の情報を繋げれば、研究者が当初予期しなかった事実が浮かびあがってくる。

報告では、発見したイッシューをどのように表示するかについて、既存の官報・史資料、写真データ等と比較参照できるモデルを実行可能な課題としてあげた。そして、こうした研究は、東南アジア仏教徒にとどまらず、地域や宗教の違いを超え、聖なる空間を介した巡礼行動、人間と場（トポス）の相互の関わりを検証しなおす研究へと拡充できること、同時に、フィールドデータを共有してストックし、データを相関比較して問題や課題をみいだすことで個人の研究に完結しない新しいかたちの民族誌が近未来に展開しうる可能性も示唆した。

当日の参加者は 80 余名である。本発表の内容、発表後のフロアからの質問、２名のディスカッサントによるコメントへの応答は、本ワークショップを組織した柳澤雅之氏による編集『情報をつなぐ、地域をつかむ―地域情報学で変わる地域研究』（京都大学地域研究統合情報センター・ディスカッションペーパー）に再録され公刊される。（林　行夫）

編集後記

「掲示板」でも述べられているとおり、寺院マッピングによって「何がみえはじめているのか」ということをようやく語れるようになってきました。ここまで来るには長い助走期間が必要だったわけですが、いよいよ高く跳びだす時が来たということだと思います。このニューズレターも内容をこれまで以上に充実させ、本プロジェクトのさらなる飛躍に貢献していきたいと思います。

なお、本号の編集作業を進めていた折、林 行夫先生がメッセージをお寄せ下さいました。この場を借りて先生のお心遣いに感謝申し上げるとともに、以下にその全文を掲載させていただきます。（ま）

＊　＊　＊

平成 21 年度より京都大学地域研究統合情報センター研究員として活動され、本ニューズレター（NL）の編集主任をされてきた増原善之さんが、平成 23 年 12 月に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出された「地域史からみたラオス・ランサン王国の成立と分裂―『内陸交易国家』から『半港市国家』へ」により、京都大学博士（地域研究）を授与されました。そして、本年 4 月 1 日付をもって地域研研究員を離任され奥様とお二人の愛娘が待つヴィエンチャン（ラオス）に戻られました。本 NL 発起人として身近に散見した増原さんの辛苦と困難に耐えられた「出雲魂」と愛情に、心からの敬意と賛辞を表します。増原さんには、引き続き、寺院マッピング・プロジェクトのメンバーとして NL 編集作業をお手伝いいただきますが、元外交官にして＜地域に根ざす国際感覚＞を体現されていた増原さんが京都を離れる事態を、痛恨にして遺憾なる事態として受け止め、残されたわたしどもへの訓告と使命としてこの身に刻む所存です。増原さん、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。（HY）

【表紙タイトルバック写真】
シェントーン寺講堂外壁面のモザイク画（ラオス・ルアンパバーン，2008 年：増原善之撮影）

本ニューズレターのバックナンバーは、下記サイトでご覧いただけます。
http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/project/areainfo

発行：〒606-8501　京都市左京区吉田下阿達町 46
京都大学地域研究統合情報センター・林 行夫研究室
編集：増原善之・小島敬裕・小林 知
宗教と地域の時空間マッピング・ニューズレター第 4 号（2012 年 6 月 27 日）